

都道府県別賞一等

未来へ備える生命保険

福島県 須賀川市立第二中学校 二学年

武田 優那

生命保険。よくテレビで耳にする言葉ではあるが、『いろいろな会社があるんだなあ』と思うくらいで、これまで特に深く考えたことはなかった。さらに、私を知っていることといえ、病気などでお金が支払われるということ。そんなありきたりの知識しかない私は、生命保険について調べるため、真っ先に図書館へ向かった。

まず分かったこと。日本の生命保険の始まりは、一八六七年に福沢諭吉が著書『西洋旅案内』で、ヨーロッパの「近代的保険制度」を紹介したことがきっかけと言われているということ。福沢諭吉の門下生である阿部泰蔵によって、一八八一年に日本初となる保険会社が設立された。その後は徐々にではあるが保険の大切さが理解されるようになり、各地に普及していったそう。

そして、生命保険は「相互扶助」の考えから誕生した仕組みである。相互扶助とは、お互いのために助け合うということ。つまり、保険に加入している大勢の人が支払ったお金が困っている誰かを助け、もしものときは自分も助けてもらう。そうやって、いざというときに保障が得られるという素晴らしい仕組みなのだ。そのためにコッコツと保険料を支払っていくのだが、『預貯金とあまり変わらないのではないか』という小さな疑問が生まれた。しかも、もしもが起きなければお金を受け取ることはない「掛け捨て」という事実にも、何とも不思議な感覚を覚えた。

人が生きていく中では、災害や事故、病気など、予期せぬ出来事が突然起こるリスクがある。さらに、二人に一人がガンになると言われている時代。その治療費は高額で一人ではカバーできない部分が出てくる。さらに、治療中は働けず収入が減り生活の不安もつきまとう。病気になり心も体も弱っているときにお金の心配も重なっては、治療に立ち向かえないし家族も辛いと思う。預貯金は少しずつ貯めていくため、すぐにまとまったお金を用意できない。一方で、生命保険は加入したときから大きな保障を受けられるというメリットがある。起こるかどうかわからないが、起こるとお金がかかるものに備えるのが生命保険。つまり安心を買っているのである。また、支払った保険料は必ず誰かの役に立っていると知り、深く納得した。

我が家では、親が生命保険に入っていると教えてくれた。入院や手術が必要になったときに保障してくれる医療保険、それと死亡保険に加入しているそう

第61回中学生作文コンクール

だ。本当は、働けなくなったときに支えてくれる保険、教育費を準備する保険にも入りたかったが、経済的負担が大きく断念したそう。私は、まだ生命保険に入っていない。母曰く、子育てや生活が落ち着いてきた二歳の頃に入ろうと思った矢先、私が手術の必要な病気になってしまった。手術後一定期間のフォローを経て完治したのだが、完治して数年経たないと加入できないという縛りがあるらしい。毎日の忙しさもあってタイミングを逃してしまい、母がやっと重い腰を上げて申込書を書いた矢先の中学一年生の九月、私の右足に病気が見つかった。幸い痛みは治まり、急ぎの手術は必要なく、症状が出なければ経過観察可能ということだった。しかし、これは持病となり、『私はもう一生保険に入れないのでは』という不安にかられた。母は、

「生まれてすぐに保険に入ればよかったな。」

とポツリ。後悔しているようだった。思い立ったらすぐ行動することが大事だと感じた。

生命保険はリスクへの備え。様々な保険の中から正しく選び、知識を持って賢く生きていきたいと思う。今回の作文をきっかけに生命保険の大切さを知り、身近なものだと感じる事ができた。生命保険は自分、そして家族を守るもの。リスクと隣り合わせの日々の中、安心して暮らしていくためにも必要不可欠な存在である。十八歳になれば私も成人。将来を見据え、しっかり備えていきたい。